

り、食べる事だけ考えて暮らせるようになった。南満にいたわれ／＼はまだ良いほうだ。北から流れてくるたくさんの人びと、特に女子供の苦勞を目のあたりにして、手を貸すことのできないのが残念だ。

ようやく帰国の話が出始めて、私の帰国も決まった。身のまわりの物をふとん袋で造つたりユックにつめて、家の物は全部そのまま、さあ、出発と玄関で子供に靴をはかせていると、暴民が家の中に押し込み、われ先にと家財を持ち出し始めた。それを見ながらなんともいえない気持で家を出た。

駅で待つていたのは石炭用の無蓋貨車で、一昼夜の間、沿道の暴民におびえながら、大連の近くの港町に着き、ここでも床無しの民家の収容所で約一週間、食事も水も満足にとれず、座つたままの寝起き。

いよいよ大陸を離れて博多に着いた。感無量である。さあ上陸と思ったら、またストップ、船内に伝染病患者あり、上陸中止、いら立つ心を押さえて三日間港町を眺めていた。

四百余名の自決

長野県 北条 としゑ

北満の東安省鶏寧県、第四次哈達河開拓団長貝沼洋二先生は東京生れで北海道農大卒の開拓精神にもえた立派な方で四十三歳だった。

主人は昭和九年に内原訓練所。十年に満州の奉天訓練所をそれぞれ修了して秋に哈達河開拓団の先発隊として五十二人が入植し、十一年に本隊が入植したので三百人になった。

私は昭和十二年十月開拓団員の花嫁として渡満、主人は二十四歳、私は二十二歳でした。

三年間の共同生活から個人農耕になりつつあつて畑も水田も豊穡にめぐまれランプ生活から電気もつくようになるとのことで開拓地も着々文化の開花が咲き始めた感じでみんな張りきっていました。

二十年八月八日朝、エンジンの音に驚いて窓をあけ

たところ、見なれない飛行機が私たち本部の上を低空で飛んできました。

九日、早朝に警察から知らせがあり、すぐ開拓団は牡丹江まで一週間の食糧と貴重品、着替えを用意して避難せよとのことである。本部員はすぐ四里四方の各部落に馬で走りまわったが大変であった。一同が集合して出発したのは、十日午前九時ごろでした。一度は避難しても、一週間後には必ず開拓団に帰って来れるものと思いながら、家はクギづけにしてふり返りながら出発しました。

もう既に、東海駅と鶏寧駅の間にある鉄橋は爆破され、汽車は通れません。軍用道路一本しかありません。鶏寧町は戦火につつまれ、燃えている町の中を馬車にしがみついて空襲をうけながら夢中で走り抜けました。

十一日は朝から曇り空で、一同はおそろしくて話し声も出ず林口町の手前の麻山まで来ました。両側は小高い丘で、その合い間を通らないと林口に出られません。その丘の上から、私たちをめぐって急に発砲して

きました。ソ連兵です。そのときは、運悪く、軍隊、地方人、開拓団も入りみだれて南下する途中でしたので、団長の命令で開拓団は後方の丘のかけに逃げろと言われ、馬車から飛びおりて逃げました。三十分ぐらいで銃声がなくなったので、私は団本部を出るときに、北海道の方でお母さんに亡くなられた女の子を二人預かり、一緒に連れて来ておりました。夕方から雨になりました。林口まで行かないと汽車に乗れません。ぬかるみの道を夜通し馬車にゆられて行きました。そこちから避難民が南下してくる中で、団長の指揮もなかなか思うとおりにいきません。

十二日は雨もあがり、少しは気分も明るくなりながら、今のうちに貴重品を取りにいけるものは行っていくように言われ馬車のあるところに行き、持ち帰ろうとしているところへ、東安の町から南下してきた自動車隊の兵隊さんが車を止め、私たち三人に早く乗れ、すぐ後方にソ連の戦車が追いかけて来ると言われ、車上から手をかしてくれたので乗りましたが、十分と走らないうちに車めがけて発砲され、急いで飛びおりる

と兵隊さんの後につづいて、畑の中に逃げ込みました。射たれて何人が亡くなりました。私たちは畑から出ることもできず、畑のまわりをソ連兵が判らぬ言葉を使いながら歩く音をきき、うずくまってふるえながら夜の明けるのを待ちました。

開拓団の方たちのところへも行けず、生き残った兵隊さん方と牡丹江めざして歩きはじめました。お金だけは胴巻きに入れて、ほかは何一つありません。でも南下する途中に次々と兵隊さんの部隊名は違いました。一緒になって、誰もが敗れたくない、日本は必ず勝つんだと言っていました。今はソ連から発砲されても、自分からは発砲してはならぬ。牡丹江まで行けば、軍は態勢を整えて戦うのだからと、銃をもち続けておりました。一時は百人あまりもの兵隊が、一緒に行動していたが、治安の悪いところへ出るとソ連の捕虜になるから山の中を南下しようと、食糧はないので、畑の馬鈴薯を掘り生で食べました。食べられる物は草の葉や白い根でも何でも食べました。

あるときは大きな山の麓を四日間も歩いて、だいぶ

南下したと思つたら、四日前に通つた道に出たこともありました。憲兵隊が十人ぐらい一緒に自決しているのを見て通りました。日本は敗けたのかなと思つた。そちこちに子供がぬかるみにはまり、お母さんと叫んでいる姿があつた。はじめはかわいそうに同じ日本人なのにと思いましたが、誰もが食べる物もなく歩いてゐるものだから、力つきていて、自分のことだけで一杯で、ごめんね、と言いながら通り越してきたこともありました。私は七回砲弾の下をくぐり抜けましたが、幸い頭にかすり傷を受けただけで逃げつづけた。

毎日、毎夜野宿であります。真夜中に熊や狼の鳴き声もしばしばきき、あるいはこんな猛獣におそわれて生命を失うかも知れないと思つたこともありました。兵隊さんも一人去り、二人去りして、日本は戦いに敗けたのだと知り、五常にたどりつき開拓団の収容所に入りましたが兵隊も大切に持ち歩いた銃をソ連兵に渡し、私たちと同じ避難民となりました。

収容所には私と同じ開拓団にいた速藤さんがおられ

嬉しかったが、はじめて哈達河開拓団の自決をきかされ、私は泣くにも泣けない気持ちでした。貝沼団長が八月十二日の麻山の場所で、戦場の中を女、子供も、年寄りの四百人あまりの者が一緒に逃げて、途中で一人二人とうたれて死んでいくよりは、一緒に自決してくれと言ったそうです。在郷軍人の人達は死なずに、日本は必ず勝つから私達の分まで戦い抜いてくれと言われ自分から先に自決されたそうです。小さい子どもたちも死ぬのは嫌だと言わず、つづいたそうです。

収容所も栄養失調で亡くなる者が毎日出ました。一日一杯の高梁のかゆでは無理ありません。日本に引き揚げるまでは自分で働いて食べなければと思い、幸いに遠藤さんの知人がハルピン満拓公社に勤めていた方を訪ねてお願いして斡旋していただいたのが、ハルピン南街の満州人である郵便局長の家で、手伝いとして住みこみました。仕事は炊事や掃除のほか、子供や祖母の相手になりました。

一家は大の親日家で、ご主人は昭和のはじめに東京の大学を、長男と長女も新京の大学を出ており日本語

は堪能でしたから私は中国語を使わずにいられました。

住みこんでから一か月ぐらいいのとき、急に発病し、発疹チフスで医者から助からないと言われたが、祖母は中国の薬を私にくれて、早く飲みなさい、大丈夫よくなるから、と励ましてくれて日夜一緒に傍にいて世話を下さった親切には今でも思い出すとき感涙が流れます。私は治って一生懸命お手伝いしました。

二十一年六月ごろ、ハルピンで引揚げがはじまるという話を聞きました。七月はじめごろ、遠藤さんが私のところに来て言うには私は自分一人では内地に帰れない、今一度麻山の自決の場所へ行き、遺骨を拾いに行く、と私と水さかずきをして別れ、単身で荷物車に乗り、現地に行きました。幸いに麻山の原住民の協力を得て一か月もかかり八月はじめに無事に帰って来ました。

遠藤さんの話では、あまりにもたくさんの方が死んだので、その場所へは満人も誰一人として近寄る者がなく、一か年たっても自決したときのままになっていたとか、小さな子供たちは骨の頭に帽子をかぶり、靴

もそのまま骨の足にはいていて哀れでした。貝沼団長の遺品、遠藤さんの奥さんや子ども、近所の奥さんや子供の遺骨を涙を流しながら拾い持って来ました。

遠藤さんは終戦当時は召集されずに開拓団に残っていたのですが、自決のときに団長から、あなたは在郷軍人だ、軍人は死なずに戦ってくれと言われた一人です。二十一年に引き揚げ後は北海道開拓に行き、千歳空港のそばに入植して暮らしております。

私は親切にして下さった中国人に送別会までしてもらって無事に日本まで帰れるように泣いて下さった中国人の子供たちに別れて、八月中旬に第三回避難民引揚げで遠藤さんと一緒にハルピンを出発しました。

乗ったのは箱のない貨車で、四方の角に網を張ってありました。汽車が止まるたびにゆれが激しく、また走る途中に振り落とされて、そのまま亡くなった方もおりました。また駅には止まらず、草原に汽車を止めて全員を調べ、貴重品は手あたりしだいに盗りあげられたほか、お金を出さなければ新京まで走らせないと言われ、集めては出しました。しかも一回だけではな

く、今度は奉天まで、次は大連までと何回もやられたが、避難民は日本に帰りたい一念で誰も小言一つ言わずに金や貴重品を出しては汽車を走らせました。コロ島に着いたときは一同が無一文でした。

コロ島から九月十七日に出港し、愈々日本に行けるんだと泣きながら、船底で万歳と幾度か叫びました。二十五日に九州の博多港に着き、なつかしい日本への第一歩をふみしめながら上陸し、博多の収容所で一千円が渡された、それでも無一文だったので嬉しかった。ここには二泊しました。

引揚げ列車で塩尻まで来て乗り換え、伊那市に着きました。何年ぶりかで見る伊那市はなつかしく、涙が出てきました。主人は二十年五月に満州の奉天から千葉にまわり、そこで終戦になって実家に復員しており、駅に迎えに来ていたので何よりも力強く思いました。主人は主人の実家から私達の住む家を建ててもらい、田畑も分けて貰いました。そして主人は農業協同組合に勤めることとなり、故郷の暖かい情をひしひしと感じました。

昭和二十年に麻山で自決された方々の三十三回忌なので、五十二年三月に東京桜ヶ丘の一角に建っている哈達河開拓慰靈碑の前で法要が行われ、主人と二人で参加いたしました。貝沼团长以下四百余人のご冥福をお祈りに、生き残りの方々が集まり、当時の思い出や、終戦の悲しい思いを語り合いました。

私たち生存者は、大陸に眠る人たちの供養をできるかぎりしようと誓いあつて別れました。

少年義勇軍の思い出

富山県 今川 長門

学校卒業後のことについて、いろいろと思索していた矢先、担任の先生から、君は義勇軍に入らないかと話を持ちかけられ、その概略についても説明してくれ、なんのためらいもなくよしそれだ。

それもその筈、私は六男坊だ、いつまでも甘えておれぬ身、このことも大きく左右した。その胸裏には服

装はりりしく恰好の良い、そして立派な学校のような宿舍で軍隊につぐものと一人合点、両親の説得も馬の耳に念仏、試験に備えてある程度勉強もしたが、試験の全く幼稚なことにいささか、がっかりしたもの合格は合格だ。

昭和十三年五月、村あげての熱烈な歓送に応え、夢と希望を抱き、満蒙開拓青少年義勇軍という美名のもとに、内原訓練所に入所、時に十四歳の少年、ここで約四十日の精神教育と開拓訓練を終え渡満、鉄の戦士と、もてはやされ、東京市内をリュックサックに鉄の柄一本肩にして、勇ましく市中行進、靖国神社の石段、明治神宮の玉砂利を踏む。厳肅な音、今も記憶は確かだ。そして新潟港に集結、父が富山から見送りにやつて来てくれた。ドラの音、日の丸の旗、別れのテープ、涙の別れと共に満州丸という小さな汽船が私共を日本の陸地から離れさせたのであった。

寧安大訓練所に入所、アンペラ小屋、五、六棟草むらの中にわれわれを迎えた。これが私の第八中隊（堀口中隊）である。全く期待はずれ、夜はアンペラをと